

知覚システムによる不変項の発見と、実在への接近: 異種の感覚モダリティーにみられる相違と、個体間の相違をつなぐもの
三嶋 博之

James J. Gibson(1904-1979)の生態心理学では、人間や動物の個体による「アフォーダンス」の直接的な知覚が主張されると同時に、その公共性ないしは社会性——すなわち、個体間での知覚の共有——も主張される。「アフォーダンス」とは人間や動物によって知覚される意味ないしは価値であるとされるが、これらが観察点を移動する個体によって安定的に持続して知覚されるとともに、複数の個体によっても同様に知覚されるという主張は、いかにして成立しうるのか。ここで鍵になるのは、「不変項」の知覚というアイデアである。

伝統的には、解剖学的に同定された何種類かの感覚受容器が、その種類に応じた特殊な刺激に感受的であるという生理学的な事実にもとづき、それらの反応出力が内的にあらかじめ所有されている何らかの合理性によって意味づけられることで、世界についての認識が成立すると考えられてきた。しかし、Gibsonは、単体の感覚受容器が世界の認識へとつながる唯一の窓口となるのではなく、複数で多種の感覚受容器が効果器とともに組織化された「知覚システム」が、外界の刺激そのものではなく、刺激流動の「パターン」としての不変項を抽出するように作動すると考えた。

たとえば、私たちは、目を瞑り手で持った物体の「重さ」の印象を知ることができるが、これは手や腕に埋め込まれた感覚受容器に加わる圧力等の印象、ないしは筋活動による努力等の印象とは独立したものである。なぜなら、これらの印象はたとえばその物体を揺すったときには刻々と変化するが、物体の重さについての印象はむしろその変化の中でいっそう顕在化するからである。このような安定的な知覚は、物体を把持して揺すするという出来事で固有に生じる、刺激流動の安定的なパターンすなわち不変項を、私たちの身体が統合的なシステムとして、その作動の中で抽出できるときにはじめて可能になる。

不変項はパターンすなわち情報であり、その担体からは半ば独立した存在である。すなわち、昼夜の周期は、目で見た光でも、耳で聞いた音でも、皮膚で感じた温度でも知覚することができる。したがって、Gibson生態心理学においては、いわゆる五感としての各「感覚モダリティー」は、それらの中心を構成する感覚受容器の解剖学的な構造の差異によって絶対的に区別されているわけではなく、機能的に区別された、いわば「注意のモード」と呼ぶべきものであり、これらは通常、同じ出来事に対応した、しかし異質な刺激流動の中に含まれる同質の共変を、協同的に抽出するために作動する統合的システムである。

発表においては、このような感覚モダリティー間の協調の問題を中心に、近年報告されている研究データを示しながら検討する。また、これを踏まえ、「不変項」の抽出という考えの下では、特定の個体と他者との関係は、同一個体内における異種の感覚モダリティーに見られる関係と本質的に同一の問題となることを主張し、議論したい。